

ふるさとの民話 (第三話)

『大けやきの天狗さん』

むかし、飯川の大けやきの前に、
大きな造り酒屋があった。

ある時、その店へ、この辺りでは
あまり見かけない、白髪で白い長い
ひげをはやした老人が、酒を買いに
来た。



その老人が差し出した器は、一合か、せいぜい二合ぐらいしか入らないような小さな徳利でした。その上、口は、針で突いたほどの穴しか開いていなかった。それなのに、老人は、「この徳利に、酒を一升入れてくれ。」と言った。店の人は、あきれて「そんなちんこい徳利に、一升は入らないし、だいいち、こんなちんこい穴に、酒も水も入らない。」と言ったが、老人は、「入るか入らないか、とにかく入れてみてくれ。」の一点張りだった。

しばらく、押し問答をしていたが、店の人は、だんだん腹が立ってきた。しかし、老人は、「もし、入らなくても、お金はちゃんと払う。」と言うので、店の人は、しぶしぶながら、じょうごを適当にあてて、一升ますに、酒をなみなみとつぎ、静かに傾けた。すると、不思議なことに、酒は、一滴も漏れずに、見事に針の穴ほどの徳利の口に吸い込まれていった。見ている一同は、ただ驚いているだけだった。

老人が出ていくと、一同は話し合っ、あの老人は、いったいどの誰かを調べてみようということになった。店の使用人の一人が、老人の後をつけた。

老人は、知ってか知らずでか、急ぐでもなく、ゆっくりでもなく、不思議な足どりで歩いていく。だいぶん歩いた頃、使用人が、ふと気づくと、なんと店の前に来ていた。おそらく、飯川の村を一周したのだろう。

やがて、老人は、うしろを振り向くと、にっこり笑って、大けやきの中へスーと消えていった。

これを見た使用人と店の人たちは、「これこそ、噂の大けやきの天狗さんにちがいない。」ということになり、それから後は、村中の人たちが、大けやきも天狗さんも大事にするようになったという。

(飯川町 高田 早苗)